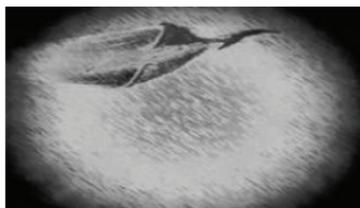


Excelent lady Aki
総集編

Ohtsu Kiyoshi
大津清志

装丁 溝上なおこ



目次

宇宙人ミズリイとの出会い 5

第1章……………6 第2章……………8 第3章……………12 第4章……………17

第5章……………20 第6章……………24 第7章……………28 第8章……………29

第9章……………36 第10章……………38 第11章……………39 最終章……………40

時空超越 45

第1章……………46 第2章……………48 第3章……………52 第4章……………58

第5章……………71 第6章……………89 第7章……………99 第8章……………102

第9章……………105 第10章……………111 第11章……………118 第12章……………138

宇宙の友よ 171

第1章……………172 第2章……………175 第3章……………194 第4章……………200

第5章……………206 第6章……………209 第7章……………218 第8章……………223

第9章……………227 最終章……………234

あとがき……………235

宇宙人ミズリイとの出会い

第1章

時は流れ今は西暦二二六七年、毎週世界各国（七か国）の、宇宙センターから宇宙定期便が飛び立ち、また一週間位で帰還して来る。もちろんこの時代には現在のようにスペースシャトルを世界が見つめる事もなく、ちょうど現在の国道か高速道を走る大型トラックの定期便感覚でしか見られていないのが現状である。と言うのが、西暦二千二十年代に超電磁波利用法と反重力の解明、小型軽量最小化されたビッグバンの活用をいずれも一機の宇宙船に縮小搭載させることに成功（いわゆる核燃料の進歩型）し、宇宙船の形もスリムになり、ちょうど現在のコンコルドに似た先端部分が非常にとがった形で見えた目も格好いい飛行機のような宇宙船に改良されていた。

その頃亜紀（二五歳）は日本の宇宙船の初めてのファーストパイロットで月一回（七日間）月へ行き、次は火星と地球のMONステーションおよびマーズステーションに物資の配送と旅客運輸を正パイロットとして（未来・宇宙船の名前）を操縦していた。副操縦士は二人居て一人は三五歳の既婚男性で名は有紀。もう一人の副操縦士は二八歳の既婚女性である絵美。三人とも東大の宇宙工学部を卒業しているが亜紀は首席で卒業し

アメリカのオックスフォード大学へ行き博士号も取ったことを認められ、NASAで初めて女性宇宙パイロットとして、英才教育されたエリートである。

日本の宇宙パイロットは正が七人（女性一人）副が三二人（女性五人）。もちろん亜紀は世界で初めての女性パイロットで、その部分世界的に有名な宇宙工学博士であり若き女性パイロットでもある美しき女優のような顔とスタイル、三拍子揃った美人パイロットであった。今日も種子島宇宙センターから亜紀は亜紀の操縦する未来（宇宙船名）に物資を積み入れる様子を見ながら絵美（もう一人の副操縦士）有紀（副操縦士）とスチュワードス三人でフライトにあたっての打ち合わせを管制塔下の階の部屋でミーティングしていた。今日の客は、添乗員の他に一二〇名。他に荷物の最大積載量が三〇〇〇トンでかなり大型の宇宙船である。最初MONステーションへ行き二日間停泊し、次にマーズステーションに行き、そこでまた二日間の停泊、その後地球に帰還となるわけだ。

今日の荷物は火星での地下工事前の資材がメインだ（月・火星は地下が居住基地）。月面および火星表面を見ればわかるが非常に隕石（クレーター跡）の多い星なので、地下五〇〇メートル以内は危ないので、それ以上掘進んだ所から居住区域で、そこへ地球

からハネムーンで来た若き新婚カップル、工事作業員、科学者、ふらっと一人旅の者、その他いろいろな人たちが一人三八〇万円で一往復できる。格安な値段でハネムーンは二人で六〇〇万円で行ける。快適な宇宙の旅を格安な値段で満喫できる時代に変化しているこの頃であった。

第2章

フライトまで後残すところ三時間だが、突然NASAからTELが入り今実験中のワープを解明できたと学会から宇宙工科学者全員にケネディ宇宙センターへ入り召集命令が亜紀にも下ったのであった。今までは第三宇宙速の五倍までは現在のコンコルド型宇宙船（NASA製）でも出せたが、光速に近いワープスピードは人間の第二の夢であった。第一は反重力の解明であったが、この事については今まで人間はあまりにも深く考え過ぎていたので磁力の反発の意味が理解できていなかったと言うのが反重力の発見の遅れた理由なのだが、何でもそうだが、たとえば電気はプラスとマイナスで磁力もプラスとマイナスである。だが磁力は八方向である事に気づいた亜紀は去年、宇宙工学会に一つの文書提出をしていた。もしそれが認められればノーベル賞は間違いないく

らしいの科学文書で、今回、世界が宇宙工学のトップ技術陣を集めたのも、その亜紀の文書も何か受賞の対象になるとの事で、NASAから直に亜紀に連絡が入ったのである。

亜紀はある気体に光を当てたグラデーシヨンの色対色が真空状態にどのくらい変化をもたらすか？ の部分で、今までに不明であった溶け合う色は電気を通して、その物体は移動できるか？ と言うのが課題であったが、この地球上にはない、ある気体のなかでは物質がある周波数の時にエックス(X)線およびガンマ光線をちようどC T スキャンするように筒型の寝台に人間が横たわると、なかに入った人間は、これとまったく同じ用途の寝台からその人が、衣類、貴金属を着けたまま一光年先へ出てくるという光子質量分析移動いわゆる瞬間移動機の原子式を考え、それがNASAの宇宙工学会に認められたのである。これは二〇〇二年に日本の物理学者がニュートリノ天文学でノーベル賞を取って以来の快挙で、まして二五歳のうら若き美人天才パイロットが、本当に取れるかどうかで世界が亜紀に対して注目していたのは言うまでもない。

だが当の本人(亜紀)はそこまで考えてはいなかった。学会に提出した光原子質量分析移動は、単に亜紀の想いつきで、ただの発想でしかなかったのだが、やはり亜紀も科学者で、もちろん亜紀にもアシスタントはいっぱいいる。しかしながら亜紀も一人の独

身女性、いかにずうっと東大の研究室に閉じ込めりっぱなしとはいえ、彼がないわけじゃない。亜紀が幼い頃からお兄ちゃんのような存在の三つ違いのごく平凡な、とある電気メーカーのサラリーマンで、役職は課長の石綿孝司という元カーレーサーの彼がいるのであった。もともと亜紀が宇宙パイロットになったのは、そこに理由が一つあるのであった。亜紀が十五、十六歳ぐらいの時、孝司によく箱根へドライブに連れて行ってもらった。その時彼の運転する車は二シーターで馬力もあるスポーツカーで、その時亜紀もレーサーになるんだって決めていたが、亜紀が十九歳の時、孝司が鈴鹿でFS一〇〇〇（フォーミュラソーラー一〇〇〇）※ドライバートレースカーを含めて一トンだが馬力が一二〇〇馬力）いわゆる太陽光で走る怪物マシンでのレースを戦っていた。そのシーズン最後の予選で孝司と一位とのポイント差が八ポイント、天候は雨だ。この雨でそうそうポールポジションを獲ったのはやはりシリーズトップの黒柳だった。この黒柳の家系は昔日産ワークスの黒柳元治選手から始まり親子代々レーサー一家だ。その頃この予選も残すところ後十分、雨も止みそうもないところへ一番タイムを詰める事のできる第一コーナーに日差しが照った。その瞬間孝司はコースへ飛び出て行った。幸いコースには誰も走ってなく最終コーナーから立ち上がってきた孝司のマシンは直線スピード